

千夜万欲物語

淫虐姫騎士アリツサの壊胎物語

……ああ、すみません。気がつきませんでした。ここ最近はお客さまがいらっしやらなかったものでして、つついいうたた寝をしていたようです。本当に申し訳ございません。

それでお客さん、今日はなに用でいらしたのですか？ まあ、嬪家である私の元にやって来たんですから、なにか話を聞きたくていらしたのでしょうか？……え、「あなたは本当に千里を見通す力を持っているのか？」ですって？

どこでそれを聞いたかは知りませんが、ええ、まあ、持っていますよ。いわゆる千里眼って奴ですか。まあ、未来を見通す力はございませんが、過去に起こったことや、この星の裏側で起きていること、それに、同じ時間軸でありましたら、この世界とは異なる世界で起こっていることも「視る」ことが可能です。ええ、ええ、本当ですよ。試しにお教えしてあげましょうか？ まあ、サービスって奴ですよ。

たとえば、そうですね……ここから山をひとつ挟んだ先に、クノーク村という小さな村があるのをご存じでしょうか？ そこにはロックという四大家族が住んでいるのですが――え、家族構成ですか？ 両親と、息子と娘がひとりずつ。名前は父親がイーサン、母親がレベッカ、息子がノイ、娘がアリアでございまして、年齢は父親が四二、母親が三八、息子が一三、娘が一二歳となっております。

——で、このルロック一家なんです。まさにいま、六人組の野盗に襲われておりまして、罾り殺しにされている最中なんですよ。はい。

え、「それは本当の話か？」ですって？

ええ、ええ、もちろん本当の話ですよ。父親のイーサンは抵抗する間もなく斧で頭を割られて即死してしまいましたが、母親と娘は野盗たちに代わるがわる犯されている最中でありまして、まだ生きております。ただ、娘は処女だったのか、股が裂けて血塗れになっていましてね、野盗にひと突きされる毎に、半狂乱になって狂ったように泣き叫んでおりますわ。まったく、酷い有り様ですよ。

一家の近くに人が住んでいれば、その泣き声を聞いて村の人たちが異変に気づいたかもしれませんが、残念なことに、ルロック一家が住んでいる場所は村外れのため、村人たちはいまのところ異変に気づいておりませんねえ。ただ、いま息子のノイが泣きながら助けを求めに云っている最中ですので、彼が何処かの人家に辿りつけば——あ……。

……え、「どうした、なにがあったのか？」ですって？

ええ、まあ、その……残念なことに、いま、ノイが橋の上で足を滑らせてしまって、川に落ちてしまったんですよ、はい。しかも可哀そうなことに、川には水がなかったため、露出していた岩に頭をぶつけてしまってね、頭が割れてしまって、その、脳ミソが飛び散っているところを見ると、恐らく即死でしょうなあ。本当に、可哀そうに。

え、「母親と娘は大丈夫なのか？」ですって？

大丈夫な訳ないでしょう。ふたりとも、いまでも野盗たちに犯されていますよ。特に娘の人気の高いのか、彼女、臍穴だけでなく、肛

門のほうも犯されはじめまして、いやあ、もう、筆舌に尽くし難い悲惨な状況です。なにせ、肛門から腸の一部が飛び出して叫んでいるほどですから。母親の方は娘の名前を呼びながら助けを求めて叫んでいますが、それが野盗たちの癩に障ったんでしょうねえ。顔面を何度も何度も殴られて、鼻や口から血を流して、歯も折られてしまっておりましてよ。ああ、酷いひどい。

え、「なんで俺にこんな話をしたんだ？」ですって？

そりゃあ、あなたが私の能力の有無を知りたがったからですよ。なんせあなた、昨日一晩、ルロック一家の家に泊めてもらったでしょう？ だから、教えてあげたんです。どうです、私の力について信用していただけましたでしょうか？ ああ、まあこの話はちよっとしたサービスですから、お代は頂かないのでご安心を。それに、あなた、こういう話が好きでしょう？ こういう、股間がむずむずする話が。

え、「なんで判るんだ？」ですって？

だから、言ってるじゃありませんか。私は千里眼を持っていて、未来以外であれば見通すことができます。まあ、見たいことや見たくないことがありますので、普段は能力を使わないのですが、お金をいただければなんだったって話いたしますよ。で、今日はなんのご用でいらしたんです？ あ、いや、まあ、判っていますよ。もう、あなたがここへ来た理由を「視て」しまっていますからね。

え、「アネッサ姫のことは知っているか？」ですって？

もちろん存じておりますよ。ガルバノ公国ズレア王のひとり娘にして、姫騎士の異称を持ち、公国一の美女と名高いお方ですからねえ。そしてその美しさもさることながら、大きな胸とお尻がまことに印象的な方でございまして、世の男どもであれば、ひと目見ただ

けで彼女の虜となってしまうこと必至。彼女の裸姿を夢想して、自慰行為にふける男どものなんと多いことか。お客さま、あなただつてそうでしょうか？ ねえ。

ああ、そんな赤面しなくとも大丈夫ですよ。秘密厳守、ここでの会話は一切他言しませんのでご安心を。

それで、今日あなたがここへ来た理由は、アネッサ姫がどうしてあんなことになってしまったのかを知りたかったからでしょうか？ ええ、ええ、判っておりますよ。能力を使えば、あなたがここへいらした理由はすぐに判りますから。

しかし、まあ、気にはなりますよね。姫騎士と称されるようなお方が、あんな無残な……あんな酷く変わり果てた姿で帰還をしただけでなく、それを人目につくような公共の場に、まるで見世物のように晒されてしまっていたのですからね。話題にならない方がどうかしておりますよ。しかも肉体を、それも特に乳房を、ああも悲惨で無残なほど改造されてしまっていたのですから、姫を性的な目で見ていた者ほど、アネッサ姫が辿った末路を知りたくて知りたくてたまらないでしょうなあ。

え、「おまえには判るのか？」ですって？

お客さん、いままでのやり取り覚えていないのですか？ 私は千里眼を持っているんですよ。未来以外であれば、別の世界で起こっていることさえも知ることができんです。だからもちろん知っていますよ。アネッサ姫の身にいったい何があったのか、ということをおね。

そしてお客さん、あなたはそれを聞くために——知るためにここへ来たのでしょうか？

ええ、ええ、もちろんです。お代さえいただければ、彼女の身に

何があったのかお話いたしましたでしょう。お代は少々お高いですが、それでもよろしければお教えしましょう。

え、「金貨五〇枚で足りるか？」ですって？

まあ、本音を言えばもう少しいたただきたいところですが、よろしいでしょう。強欲は身を滅ぼす元と言いますしね。

……では、お代を受け取ったところで、アネツサ姫の身になにが起こったかお教えしましょう。

……続きは本編でお愉しみてください。

没落令嬢は性畜奴として淫虐

の海に沈む

……私立めぶき学園における「学園のアイドル」的ポジションの女子生徒をひとり挙げるとするならば、男女を問わず、誰もが上崎エミカという女子生徒を推挙するに違いなかった。

容姿端麗で才色兼備。日本人と日系ロシア人のクォーターで、肌は処女雪のように白く、薄い琥珀色の髪がストレートで腰の辺りまで伸びており、手足は細くしなやかであるものの、女性を象徴する部位——つまり、胸部と臀部には日本人女性の平均水準以上の肉がついており、特に胸は、推定Jカップという爆乳であるものの、ハリがあつて形が整っているため、まるで大玉のスイカを制服の中に入れていたのではないかと見間違えてしまうほどの豊満さを誇っていた。気が強いため、多少、鋭い目つきをしているが、それでも欠点として上げられるほどではなく、むしろその目つきが異性だけでなく同性をも魅了することもあつたから、容姿にせよ、スタイルにせよ、「完璧」という言葉がこれほど似合う女性もそういないであろう。

人間の容姿はしばしば才能に直結していると言われているが、彼女の場合、ソレは実績としても如実に現れており、二年生の時から

生徒会長を務め、テニス部のキャプテンとして個人と団体で二度のインターハイ出場を果たし、学業成績においては常に上位の成績を収めている。また、私生活においては学園の広報誌に載ったことをきっかけとしてグラビアアイドルとしてデビューを果たしており、雑誌の表紙を飾ったことや、テレビに出演したことも一度や二度ではなかった。さらに彼女は、一七歳の時に初めてとなる写真集を販売したのだが、この写真集、水着のシーンが一枚も無いにも関わらず、増版に次ぐ増版を重ね、累計一二万部を売り上げた。

「男子生徒の三割は彼女目当てに入学してくる」

と言われることがあるが、これは決して比喻や誇張ではなく、彼女が学園の広報誌に載って以降、受験生や転入生の数はあからさまな増加しており、学園は嬉しい悲鳴を上げることしきりだった。

すでにこれだけで、上崎エミカという女子生徒がいかに美の女神にえこひいきされた身分であるかわかるだろう。が、彼女は運命の女神からも愛されているようで、父親は年商一八〇億円を誇る精密機械メーカーの経営者、母親は神戸に実家がある総資産数十億という資産家である。そして彼女の弟は、姉に負けず劣らずといった容姿の持ち主で、姉のデビューをきっかけに芸能界からスカウトされ、今年になって大手芸能事務所からデビューを果たした。まさに非の打ちどころがない上級国民、いや、上級一家と言っていいだろう。実際、彼女ら一家に直接会ったことがある者は、妬みや嫉みといった感情を抱くよりも先に、羨望や崇拜の眼差しを向けるとのことであつた。

だからこそ、私は思ったのだ。

こいつを、いや、この家族を——めちゃくちやにしてやりたい、と。

なぜならば、それが私の「癖」であり、「習性」であって、そのために必要な「力」を、私は持ち合わせているゆえに……。

*

……案内を受け部屋にやって来た時、上崎エミカはその端麗な容姿に怯えを含んだ表情を浮かべていた。まあ、無理もない。これまで何不自由なく、なんの心配もなく生活を送っていた身が、突然の「不幸」に襲われて、急転直下の勢いで転落する羽目になってしまったのだから。

その不安は身体のほんの少しの仕草にも表れていて、エミカは手を身体の前で交差するようにしてぎゅっと握りしめ、身体をカタカタと小刻みに震わせていた。それでも、気丈に振る舞おうと心掛けているのか、唇をきゅっと結び、視線を崩すまいと下へと向けている。そのため、彼女が私の存在に気づくまでに、声をかけるまでしばしの時間を必要とした。

「恐いかね、エミカ君。ん？」

その声を聞いて、上崎エミカがハッと顔をあげた。そして、私と目が合った瞬間、その表情に驚きが翼を広げた。

「だ、ダメ山……な、なんであんたがここにいるのよ……っ！」

ダメ山とは、市立めぶき学園における私の別称である。蔑名、と言っているかもしれない。

私の苗字は影山という。根暗で、影が薄い、うだつの上がらない社会科の非常勤講師——というのが、めぶき学園における私の「顔」だ。その蔑称からわかるとおり、私は学園の生徒や同僚の教師たちからは明らかな嘲弄を持って蔑まれており、それは時に迫害めいた

実害を伴って私を襲うことがある。物を隠されたり、階段から突き落とされたり、生徒が授業を集団でボイコットしたり、そのことを同僚たちがつるし上げるといった具合にだ。

端から見れば明らかな弱い者イジメであり、良識を兼ね備えた同僚や生徒の中には眉をひそめる者も少なくない。しかし、私に対するそれら加虐行為を、私はむしろ嬉しく思っていた。なぜならば、自分の心の奥底に、ほんの少しだけ残っている良心の呵責というモノを、彼ら自身が蛮行によって消し去ってくれるからである。おかげで、私は心置きなく「生贄」を食ることができるのだから。

私は手にしていたワイングラスを黒檀製のテーブルに置きながら、ニヤリと不敵な笑みを浮かべてエミカをたしなめた。

「こちら、いくら見下しているとはいえ、仮にも教師にそんな言葉をついたらダメだろう。言葉は丁寧に、そして慎重に口にしないと、後で後悔するかもしれないぞ」

それを聞いて動揺したのか、あるいは格下と思っていた相手に侮蔑されたと感じてか、エミカがカツとなった様子で口調の強い言葉を放ってきた。

「う、うるさいッ！　だ、ダメ山の分際で……っ！　そ、そもそも、なんであんたがここに居るのよ！」

「さあ、なんでだろうね」

「な、なに笑ってるのよ、気持ち悪いっ！　聞いているのはわたしよ！　こ、答えなさいったらっ！」

事情が飲み込めず、困惑が隠せないのか、唾を飛ばしながら質問するエミカ。いつもの知的な彼女からは想像もつかないような動揺ぶりであり、声である。心地よい啼き声だ。

私は足を組み替えた。

「なぜ？ 異なることを聞くねえ。君は学校での成績は極めて優秀だが、それは反復学習の成果なのかな？」

「な、なんですって……！」

「察しが悪い、と暗に言っているんだがね。まあ、こんな状況では致し方ないか」

そう言っつて、私はもう一度、ニヤリと嗤った。今度は、相手がゾツとするように、悪意を凝縮した表情で。

「君をここに呼んだのは私だ。だから居て当然だろう。ん？」

その言葉を聞いて、そして私の悪意に満ちた表情に気圧されて、エミカの顔に酷い困惑の色が浮かんた。

「え、え……な、なんで、だ、だって……だってわたし、わたしは……」

「お父上の会社への融資と引き換えに「身体」の提供を求められたから来た、だろう？」

「……——ッ！」

どうしてそれを……？ という驚きの表情でもって、エミカが私を見返してきた。大きな瞳を、さらに大きく見開いて。

「ふふふふ。そんなに驚かなくてもいい。私が部下をメッセージヤーとして使わせて、君にそう持ち掛けたのだから知っていて当然じゃないか。なあ？」

エミカの怯えの色が強くなり、身体の震えが大きくなった。

「だ、ダメ山……あ、あんたいつたい……っつっ！」

私はもう一度、顔に悪意を凝縮させた笑みを浮かべて見せた。

「めぶき学園における私の立場は、生徒にも同僚にも馬鹿にされるうだつの上がない根暗な非常勤講師だが、それは仮の姿に過ぎず、実際の私はもう少し、そう、例えば、指一本動かすだけで、時価総

額が数百億程度の企業を倒産させるくらいの力を持つ立場にいるのだよ」

「……！」

深く語るつもりは無かったため説明は省いたが、私は「陰影会」という、闇の社交界のような秘密結社に所属している。財界の雄であった父親の跡を継ぐ形での入会で、この組織には、政財各界の重鎮や権力者たちが多く在籍しており、「表」の世界では発散できないような「欲望」を爆発させるための場としている。そのため、横の繋がりが極めて強い。

この組織の会員になるための条件は、日本円で最低三〇〇〇億程度の金融資産を有していることと、会の規則を遵守すること。それは秘密の厳守であり、相互間の協力であり、モノの提供である。先にもあるように、この会のメンバーは、私を含め、表立って人と言えないような変態的嗜好の持ち主ばかりであるため、上質な「生贄」を供物として常に欲している。私が正体を隠してめぶき学園に務めているのは、そのための「獲物」を物色するためであった。

「き、企業を倒産させる力って、ま、まさか……！」

私の話を聞いて全てを理解したのか、エミカの表情から困惑や動揺といった要素が消え、明らかな怒気の色が浮かんだ。

「私のお父さんの会社が潰れそうになったのは、ま、まさか……：あんたのせいっ!？」

怒りに震えた声で問うてくるエミカ。

私は噓って応えてやった。

「そんな訳ないだろう」

明らかな嘲弄を含んだ声で告げてやる。

「君のお父上の会社が潰れそうになっているのは、君のお父上が経

営判断を誤ったからであって、私のせいじゃない。ただ単純に、君のお父上が無能だったってだけの話だ」

「……ッ！」

それを聞いて、エミカは実に悔しそうな表情を浮かべ、視線を反らして唇をぎゅつと噛みしめた。

それを見て、私はまた笑ってしまった。

「ふふふ……」

もちろん、嘘である。彼女の父親の会社が潰れそうになっているのは、私が陰影会の力を行使した結果であって、売り上げも、利益率も、成長率も、なにもかも順調な会社から銀行が融資を引き上げたのも、大口の取引先が契約を解消したのも、優秀な社員がヘッドハンディングで引き抜かれたのも、全て私のせいであり、描いたシナリオの結果だった。

そう、全ては、彼女を――いや、彼女を含めた上崎一家を、不幸のどん底に叩き落とすためである。めちゃくちゃにするためである。

「そ、それで……」

「ん？」

ぎゅつと手を握りしめ、唇から血が流れるほど強く噛みしめてから、エミカが私に鋭い視線を向けてきた。

「ど、どうすれば……お、お父さんの会社を、その、助けてくれるの……」

それは意を決したような、覚悟を決めたような言葉だった。

「私が遣わしたメッセンジャーから、話を聞いているはずだろう。

彼は、なんて言っていたかな？」

「……ッ！」

メッセンジャーに言われたことを思い出したのか、エミカの顔が

沸騰したように赤く染まった。

そして彼女はポツリとひと言、「変態……」と小さな声で呟いた後、言葉を続けた。

「身体、を……捧げろって、言われたわ……」

私は嗤って頷いた。

「そう、そうだ。そのとおりだ。だが、そこまでだ。まだ君は身体を捧げるとは言っていないし、いまならまだ引き返すこともできる。いまならまだ間に合うぞ。後ろを向いて、引き返し、この部屋から出て行けば、君はそれ以上、苦しまなくて済む。私に身体を「弄ばれ」たくないのであれば、その選択をするのが賢明だろう。違うか？」それを聞いて、エミカが睨みつけるような目で私を見た。

「そ、そんなこと言って……わ、わたしがそんなことしたら、あなたはお父さんの会社を潰すんでしょう……っ！」

「うん。まあ、ね。虱みたいに潰すかな。プチツとね」

「……ツツツ！」

私の悪辣な物言いに、エミカは相当、立腹しているようだった。しかし、彼女に選択肢はない。決断は、時間の問題だった。

「くう……ッ、い、いいわ……好きにきなさいッ。で、でも、どんなに身体を弄ばれたって、汚されたって、心だけはあんたに屈しないわ！ そのことだけは、覚えておきなさいッ！」

「ふふふふ……」

「な、なにが可笑しいのッ！」

私は、もう一度、笑った。

「いやいや、心を強く保とうと、懸命に振る舞う姿が酷く滑稽だね。思わず笑ってしまったのだよ！」

「な、な……ッ！」

「だがまあ、心を強く保つことは大切だ。さもないと、すぐに心が壊れてしまうかもしれないからねえ。君は、耐えきれるかな。私の責め苦に」

「そ、そんなの、平気よ！ あんたに犯されるくらいで、わたしが泣き叫ぶはずないじゃないッ！」

「そうか、そうか」

私は笑いながら頷いた。

そして、命じた。

「じゃあ、まずは服を脱げ。そして裸になるんだ」

「……ッ！」

突然の命令に動揺しながらも、エミカはその細くしなやかな指を震わせながらボタンに伸ばし、制服のソレをゆっくりと外しはじめた。

「うう、くうう……」

唇を噛みしめながら、一枚、また一枚と、ボタンを外してゆく。これほどの新鮮さに満ちたストリップショーはなかなかお目にはかかれまい。緊張と動揺で指先の動作がおぼつかず、全てのボタンが外れるまでにやや時間がかかったが、その分、愉しむことができたのでよしとしよう。

「さあ、次はスカートだ」

「わ、わかってるわよ……」

間髪入れずの催促に、エミカは一瞬、感情的になったのだろうか。スカートのフックを外す手つきは素早く、そしてソレを手放す動作も早かった。

スカートが、重力に身を委ねて床に落ち、ぱさっという音がした。

その外見とは裏腹に、地味なパンティーが露になった。エミカは

反射的に、いやさりげなく、腕で股間の部分を覆い隠した。それと同時に、私から視線を反らし、両方の頬を紅葉のように赤く色付かせた。

恥ずかしいのだろう。それも、この上なく。

しかし、私は容赦するつもりはなかった。

「どうした？ 私は裸になれと命じたのだ。下着も脱ぐんだ」

「……っ！ わ、わかってるわよ……っ！」

言葉の追撃を受け、おもむろにブラジャーを外し、パンティーも脱ぐ。そして、生まれたままの姿になった。

「ふふふふ……」

全裸姿になった彼女を見て、私は無意識のうちに舌なめずりをしてしまった。そして、彼女の肢体を、未熟でありながらも成熟しているというアンバランスな肉体を、より近くで、直に堪能すべく、椅子から立ち上がって距離を詰めた。

「ふふふふ、素晴らしい身体だ。まるで芸術品のようなじゃないか」

「……ツツツ！」

私が称賛の言葉を耳元で囁くと、エミカは恥ずかしそうにプイッと顔を横に反らした。

実際、彼女の肉体は素晴らしいのひと言に尽きる一級品だった。

推定Jカップという乳房は、それよりも大きいのではないかと思えるほどの大きさと豊かさを誇っており、白く、まるで巨大な真珠の塊のようであり、乳首の色は淡いピンク色をしていて、緊張のためか先端部分がツンと高く尖っていた。

「ふふふん……」

私は胸から視線を動かすと、舐めまわすような目つきで彼女の全身を視姦した。

腹部には無駄な脂肪成分が一切付着しておらず、それは二の腕や太腿も同様だった。全身の肌には傷ひとつなく、まるで最高級の白磁のようであり、産毛すら見えないほどスベスベだ。そして、視線を後ろに向かわせると、日本人離れした、芸術的な形の尻肉が目に入ってきた。乳房同様に、たつぷりと脂がのった、家畜に相応しい尻が。

私はその尻肉を、片手でぎゅっと掴んだ。

「ひッ、ぐ………ツツツ！」

その瞬間、エミカの身体と表情が強張り、私の指先は彼女の尻肉に深くめり込んだ。

「いい肉だ。ほどよい固さと柔らかさを兼ね備えた絶品だ。しかも手を加えていない天然モノとなると、そうお目にかかれるもんじゃない」

そう言いながら、私は彼女の尻肉を掴んだまま、弧を描くように腕を動かした。エミカの熟れた尻肉が、腕の動きに合わせて、まるで弾力性に富んだスライムのようにぐにぐにと揉み動く。手指に力を込めると、指が半ばまでめり込んでしまうほど柔らかい。

「ぐっ、くうふうううううううう………つつっ！」

尻肉を掴む私の握力に耐えるように、エミカは顔をしかめ、悔しそうな表情を浮かべながら、手をぎゅっと握り締め、唇を噛みしめた。緊張が尻にも伝わって、芯の部分が硬くなるのがわかった。視線は相変わらず横に逸れたまま、身体の震えは怒りと屈辱から来ているものに違いない。

「ふふふ………」

私はそんな彼女の様子を堪能しながら、空いているもう片方の手で、たわわに実った彼女の白い乳房を力任せにぎゅうっと掴んだ。

